

件。対 10 万人では男性では 21.9 人女性で 5.7 人であった。また、年齢では 20 歳から 24 歳では男性で 2.4(対 10 万人)、60 歳以上で 94.8(対 10 万人) であった。また、中年女性における突然死の割合が低い傾向がみられた。突然死の原因としては、100 例が急性心不全、43 例が急性心筋梗塞、4 例が心筋症、2 例が解離性大動脈瘤であった。心臓関連疾患による突然死は 153 例 58.6%であった。クモ膜下出血が 41 例、脳出血が 25 例、脳梗塞が 8 例で脳神経関連疾患による突然死は 79 例 30.3%であった。その他は肺炎 6 例、気管支喘息 5 例、消化管出血 3 例、てんかん 3 例であった。心臓関連疾患による突然死のうち、69 例が発症から 1 時間以内の死亡。32 例が 1 から 3 時間であった。月別の突然死の数では 4 月が 34 例でリスク比 1.62(95%CI : 0.94—2.79)であった。12 月は 13 例で 0.67(95%CI : 0.34—1.31)であった。季節でわけると春夏秋冬で差はなかった。曜日では、日曜日(リスク比 1.90(95%CI : 1.20—2.99)) と土曜日(リスク比 1.36(95%CI : 0.83—2.21)) の頻度が高かった。時間帯も 0 時から 3 時(リスク比 1.71(95%CI : 0.94—3.10))、3 時から 6 時(リスク比 1.47(95%CI : 0.79—2.72)) の深夜から早い時間に多かった。何をしている時かというと仕事中は 38 例 17.2%と少なく、仕事をしていない時で睡眠中が 37 例、休息中が 28 例、お風呂が 10 例、トイレが 9 例という状況であった。

12 結論

突然死は土曜日曜、時間帯も 0 時から 6 時に多く、仕事中に突然死を起こすものは 17%に過ぎなかった。

13 要約

目的：働き盛りの人を襲う突然死について疫学的にはほとんど検討されていない。この研究では、突然死がいつ、どのようにして起こるのかを明らかにしたい。方法：中部日本の 10 の仕事場で働く 196775 名の労働者に対して、1989-1995 年の間に起きた前触れのない突然死について調査した。調査データの収集は各仕事場の健康管理有資格者がおこなった。結果：251 名の男性と 13 名の女性の突然死があった。頻度としては、男性は 10 万対 21.9。女性は 10 万対 5.7 であった。新年度が始まる 4 月の頻度が高かった(リスク比 1.62(95%CI : 0.94—2.79))。曜日では日曜日(リスク比 1.90(95%CI : 1.20—2.99)) と土曜日(リスク比 1.36(95%CI : 0.83—2.21)) の頻度が高かった。時間帯も 0 時から 3 時(リスク比 1.71(95%CI : 0.94—3.10))、3 時から 6 時(リスク比 1.47(95%CI : 0.79—2.72)) の深夜から早い時間に多く、仕事中に突然死を起こしたものは 17%に過ぎなかった。

文献ID 20

1 著者

Kawakami N, Araki S, Haratani T, Henmi T

2 タイトル

Relations of work stress to alcohol use and drinking drinking problems in male and female employees of a computer factory in Japan

日本のコンピュータ工場の男女従業員における仕事のストレスとアルコール問題の関係

3 掲載誌

Environ Res 62: 314-324, 1993

4 デザイン

断面研究

5 目的

日本人の社会心理的ストレス、長時間労働、交替勤務と飲酒量、飲酒頻度、飲酒による問題、うつ状態の関係について調査を行う。

6 曝露指標

長時間労働、交替勤務、5つの社会心理的ストレス（仕事の過重、低い報酬、仕事のオーバーペースをコントロールできない、仕事の将来性のあいまいさ、周囲のサポートの欠如）（質問紙によって調査）

7 結果指標

飲酒量、一回あたりの飲酒量、飲酒関連問題、うつ状態(質問紙によって調査)

8 比較指標

長時間労働などの客観的業務ストレス、5つの心理社会的ストレスと飲酒状況の関連の強さを表す。

9 実施国

日本

10 対象

東京近郊のあるコンピュータ工場で働く従業員に対して質問紙を送り、回答を返送した 2109 名(回答率 81%のうち、回答不備のない男性 1273 名、女性 377 名を対象とした。

11 結果

男性における飲酒習慣と長時間労働、交替勤務と明らかな関係が認められた。1 回の飲酒量では男性では長時間労働と報酬の不足が女性では仕事の将来へのあいまいさが関係しているのが明らかとなった。問題飲酒は男性で長時間労働と報酬の不足が関係していることが明らかとなった。うつ指標に関しては男性飲酒者で社会心理的ストレス（仕事の過重、低い報酬、仕事のオーバーペースをコントロールできない、仕事の将来性のあいまいさ、周囲のサポートの欠如）が関連することが明らかとなった。女性飲酒者では社会心理的ストレス（低い報酬、仕事の将来性のあいまいさ、周囲のサポートの欠如）の 3 つが関連していた。

12 結論

長時間労働と労働による報酬の不足が男性の場合問題飲酒につながる可能性が示唆された。女性の場合は、仕事の将来性がはっきりしないことが大量飲酒につながる可能性が示唆された。

13 要約

2581 名の男女のコンピュータ工場従業員に質問紙を送り、仕事のストレスと飲酒状況と飲酒による問題を調査した。5 つの社会心理的ストレスと長時間労働、交替勤務、飲酒量、飲酒頻度、飲酒による問題、うつ状態などについて調査した。飲酒習慣のある 20 歳以上の 1043 名の男性と 255 名の女性を調査対象とした。結果は長時間労働と労働による報酬の不足が男性の場合問題飲酒につながる可能性が示唆された。女性の場合は、仕事の将来性がはっきりしないことが大量飲酒につながる可能性が示唆された。しかし、問題飲酒や大量飲酒はうつ状態への引き金とはならなかった。

文献ID 21

1 著者

Klipke DF et al

2 タイトル

Short and long sleep and sleeping pills

短い睡眠、長い睡眠と睡眠薬

3 掲載誌

Arch Gen Psychiatry 36: 103-116, 1979

4 デザイン

コホート研究

5 目的

睡眠のパターン、不眠症や睡眠薬の使用と死亡との間の関係を明らかにする。

6 曝露指標

睡眠時間・不眠症の自覚・睡眠薬の服用(質問紙による調査)

7 結果指標

死亡(6年間の追跡調査)

8 比較指標

睡眠時間・不眠症の自覚の有無・睡眠薬の服用などを考慮した上での100人年死亡率の計算

9 実施国

アメリカ

10 対象

アメリカンキャンサーソサイエティーにボランティアで参加していた男女約100万人

11 結果

男性においても女性においても最も多かった睡眠時間は8～8.9時間であった。睡眠薬を良く使う人や不眠をたびたび自覚する人は、それらがない人と比較して睡眠時間が少ない傾向がみられた。睡眠薬の使用や不眠を訴える人は女性で男性の2倍の割合で現れた。睡眠と死亡率の関係では、男女ともに7～7.9時間の睡眠時間での死亡率が最も低くなっていた。これは、どの年代においてもほぼ同様の結果であった。男性において、4時間以下の睡眠は7～7.9時間の睡眠をとっている者と比較して死亡の危険性は2.8倍となる(女性においても1.48倍)。10時間以上の睡眠をとるものにおいても7～7.9時間の睡眠の者と比較して6年間の死亡率が1.8倍となること明らかになった。睡眠薬を頻繁に使用するものの死亡率はそれを使わないものと比較して1.5倍の死亡率となる。不眠のある男性はないものと比較して死亡率は1.34倍となる(女性は1.17倍)。不眠がたびたびあるものにおいては、男女ともに睡眠薬を使わないものより頻繁に使うものの方が死亡率が低い傾向が見られた。

12 結論

睡眠時間が7～7.9時間の睡眠の者の死亡率が最も低かった。それ以下でもそれ以上でも死亡率は上がるV字状の関係となっていた。睡眠薬を使用するものは使用しないものと比較して死亡率は高くなっていたが、頻繁に不眠症を自覚するものにおいては睡眠薬を使用した方が死亡率が低下する傾向がみられた。

13 要約

アメリカンキャンサーソサイエティーの前向き研究にて不眠症や睡眠薬と死亡率との影響について考慮した。不眠症は死亡率を引き上げる。また、男性においては4時間以下の睡眠の者は7～7.9時間の睡眠の者と比較して6年間の死亡率が2.8倍になることが明らかになった。女性においては1.48倍であった。10時間以上の睡眠をとるものにおいても7～7.9時間の睡眠の者と比較して6年間の死亡率が1.8倍となること明らかになった。また、たびたび睡眠薬を使用するものは使用しないものと比較して1.5倍に死亡率となる。死亡率を低下させるために睡眠の状況を変化させたり、睡眠薬の服用状況を変化させることは行わなかった。今後、このような研究も必要であると考えられる。

文献ID 22

1 著者

Krause N, Lynch J, Kaplan GA, Cohen RD, Goldberg DE, Salonen JT

2 タイトル

Predictors of disability retirement
障害による退職の予想

3 掲載誌

Scand J work Environ Health 23: 403-413, 1997

4 デザイン

縦断研究

5 目的

健康障害による退職の理由を明らかにすることによって労働力の増加をもたらす。

6 曝露指標

職場情報や社会経済状況、習慣、健康関連事象、既往歴(健康診断時に質問紙にて調査)

7 結果指標

健康障害によって退職したかどうか(健康診断時に質問紙で調査)

8 比較指標

健康障害による退職と職場情報や社会経済状況、習慣、健康関連事象、既往歴などをオッズ比で比較

9 実施国

フィンランド

10 対象

kuopio ischemic heart studyに参加した1038人のフィンランド人の男性で4年間の健康診断をフォローした開始時42,48,54,60歳の者

11 結果

調査開始時年齢 42 歳の集団と比較して 54 歳の集団でオッズ比 3.59(95%CI : 1.74-7.39) 60 歳の集団では 1.03(95%CI : 0.43-2.48) であった。ホワイトカラーと比べてブルーカラーではオッズ比 2.14(95%CI : 1.11-4.11)。失業期間が過去 5 年以上ある場合はオッズ比 1.98(95%CI : 1.07-3.63) であり、調査開始時に失業中である場合はオッズ比 3.45(95%CI : 0.88-13.49) であった。また、家族が 2 人以上失業中である場合、オッズ比 0.22(95%CI : 0.06-0.78) と低い値を示し、家族が自分以外に一人働いている場合、オッズ比 3.42(95%CI : 0.98-11.99)、4 人以上の場合はオッズ比 5.04(95%CI : 0.73-34.74) であった。既往歴に関しては過去の重病をしている場合、オッズ比 2.73(95%CI : 1.45-5.15) であった。生活に関しては喫煙が過去喫煙していたオッズ比がオッズ比 2.91(95%CI : 1.37-6.22)、現在も喫煙している場合、オッズ比 2.20(95%CI : 0.99-4.90) であった。仕事環境では重労働がオッズ比 3.27(95%CI : 1.61-6.63)、居心地の良くない職位がオッズ比 2.64(95%CI : 1.38-5.06)、騒音職場がオッズ比 2.83(95%CI : 1.44-5.56) であった。精神的緊張もオッズ比 3.11(95%CI : 1.62-5.99) 仕事への不満が高い方から 20%のオッズ比 1.81(95%CI : 1.04-3.16) であった。また上司からのサポートがある場合、ないものと比べてオッズ比 0.50(95%CI : 0.24-1.05) であった。

12 結論

重労働、居心地の悪い職位、長時間労働、仕事場の騒音、身体的な緊張、筋骨格系の緊張、持続的な筋緊張、精神的な負荷、仕事への不満は退職に結びつくことがわかった。仕事仲間との相談や上司などからのサポートによってこのリスクは低減されることがわかった。社会経済的な要素や病気、健康関連事象も退職との関係があった。退職と最も大きく関係する事象は職場要因のなかでも問題のある仕事環境であった。

13 要約

目的：障害による退職について考えることは労働力を増やすかもしれない。しかし障害による退職についての情報はほとんどない。この研究は、障害による退職について職場情報や社会経済状況、習慣、健康関連事象について取り扱ったはじめてのプロスペクティブスタディーである。方法：対象は kuopio ischemic heart study に参加した 1038 人のフィンランド人の男性で 4 年間の健康診断をフォローした開始時 42, 48, 54, 60 歳の方々であった。結果：重労働、居心地の悪い職位、長時間労働、仕事場の騒音、身体的な緊張、筋骨格系の緊張、持続的な筋緊張、精神的な負荷、仕事への不満は退職に結びつくことがわかった。仕事仲間との相談や上司などからのサポートによってこのリスクは低減されることがわかった。社会経済的な要素や病気、健康関連事象も退職との関係はあった。考察：退職と最も大きく関係する事

象は職場要因のなかでも問題のある仕事環境であった。

文献 ID 23

1 著者

Lecomte D et al

2 タイトル

Stressful events as a trigger of sudden death: a study of 43 medico-legal autopsy cases

突然死の引き金となった出来事：司法解剖をおこなった43の事例から

3 掲載誌

Forensic Sci Int 79: P1-10, 1996

4 デザイン

断面研究

5 目的

情動ストレス関連の突然死と心臓の剖検結果の関係を明らかにすること

6 曝露指標

情動ストレスから症状を引き起こすまでの時間が2時間以内（周囲で見ていた証言者の証言）

7 結果指標

心臓および冠血管の状況(剖検の所見)

8 比較指標

9 実施国

フランス

10 対象

パリ周辺地域のすべての不審死の事例を取り扱う病院に1990年から1994年に運ばれた、症状を起こす前2時間以内に大きな情動ストレスがあったと証言する者がいる事例の43事例を分析した。43例中、男性が29例（22～90歳）、女性14例（30～92歳）。

11 結果

情動ストレスからの発症までの時間はその場が20例、15分以内が10例、30分以内が7例、1時間以内が4例、2時間以内が2例であった。21例が口論中であった。15例は極端な恐怖を感じる状況であった。4例は、警察に尋問や逮捕さんれている最中、3例は身体的な負荷のない状態での性活動中であった。3例のみは、冠血管疾患の既往があった。3例においては心臓には特に所見は認められなかった。2例はクモ膜下出血の所見が認められた。残りの38例にて心臓の所見が明らかに認められた。18例の男性と8例の女性において心臓重量の増加が認められた。左室壁肥厚が10例で認められた。左室肥大が16例で認められた。冠疾患での死亡が明らかな27例のうち13例は1本の冠血管にのみ75%以上の狭窄が見られた。14例では3本の冠血管ともに狭窄が見られた。

12 結論

明らかな情動ストレスを受けた後に発症した突然死において、43例中38例は心臓が原因の死亡であった。情動ストレスが深刻な心臓疾患を引き起こすことを明らかにした。

13 要約

情動ストレスが突然死を引き起こす原因を剖検を行うことによって明らかにした。43例の剖検例はすべて発症時の証言者がおり、発症の2時間以内に情動ストレスを受けていた。剖検の結果38例が明らかに心臓疾患による死亡であった。27例は冠疾患、6例は心筋疾患、2例は大動脈弁の狭窄、3例は右室不全であった。冠疾患による死亡のうち25例には過去の心筋梗塞による心筋の線維化がみられた。情動ストレスが深刻な心臓疾患を引き起こすことを明らかにした。

文献ID 24

1 著者

Liu Y, Tanaka H, The Fukuoka Heart Study Group

2 タイトル

Overtime work, insufficient sleep, and risk of non-fatal acute myocardial infarction in Japanese men

日本人における過重労働、不十分な睡眠と死に至らなかった急性心筋梗塞のリスク

3 掲載誌

Occup Environ Med 59: 447-451, 2002

4 デザイン

断面研究

5 目的

急性心筋梗塞の発症と労働時間、睡眠時間の関係を明らかにする

6 曝露指標

平均の週労働時間、1年の休日数、平日と休日の平均睡眠時間、5時間以下の睡眠が続く週が年間どのくらいあるか(聞き取り調査)

7 結果指標

急性心筋梗塞の発症(心電図変化、胸部痛の30分以上の持続、酵素の変化などをもとに指定医療機関の循環器専門医が診断)

8 比較指標

労働時間、休日数、睡眠時間の平均値の比較とこれらをカテゴリーわけした上でオッズ比の比較

9 実施国

日本

10 対象

1996年から1998年間に指定された病院に運ばれた急性心筋梗塞の男性患者260

名と年齢などをマッチさせたコントロール 445 名。

11 結果

ケースとコントロールの間で、労働時間の平均値、休日の平均値、睡眠時間の平均値には大きな差はなかったが、5 時間以下の睡眠の日数に差があった。過去 1 年間の状態のオッズ比では労働時間は週 40 時間以下と比べて 61 時間以上の場合、2.1(95%CI:1.3-3.6)。平日の睡眠時間が 9 時間以上と比べて 5 時間以下の場合、2.3(95%CI:1.3-3.4)週当たりの 5 時間以下の睡眠の日数が 0 に比べて 2 日以上の場合、2.3(95%CI:1.2-4.4)であった。休日においては、過去 1 年の状態ではあまり差はなかったが発症前 1 ヶ月の状況では月 8 日以上の日がある場合と比べて 2 日以下の場合オッズ比が 1.6(95%CI:0.9-3.1)となっていた。また、発症前 1 週間の 5 時間以下の睡眠の日数は 0 日と比べて 2 日以上の場合、オッズ比 3.3(95%CI:1.9-5.6)であった。

12 結論

過重労働と不十分な睡眠は急性心筋梗塞を発生させるリスクを高める。

13 要約

目的：労働時間、睡眠時間と急性心筋梗塞の発症の関係を明らかにすること。方法：症例対照研究で症例は 1996 年から 1998 年の間に指定された病院に運ばれた急性心筋梗塞の男性患者 260 名と年齢などをマッチさせた対照の 445 名。週平均労働時間と平均睡眠時間のオッズ比を計算した。結果：週労働時間の増加は急性心筋梗塞のオッズ比を増加させた。これは、過去 1 年間も過去 1 ヶ月も同様の結果であった。週 40 時間以下の労働と週 61 時間以上の労働ではリスクが 2 倍以上になっていた。平均 5 時間以下の睡眠や週 2 日以上睡眠時間が 5 時間以下の場合、2 から 3 倍にリスクとなった。発症直前に週 2 日以上睡眠時間が 5 時間以下や休日が少ない場合、過去 1 年間そのような状態にある場合と比べてオッズ比が高くなっていた。結論：過重労働と不十分な睡眠は急性心筋梗塞を発生させるリスクを高める。

文献ID 25

1 著者

Lundberg U, Palm K

2 タイトル

Workload and catecholamine excretion in parents of preschool children
就学前の子供を持つ親の仕事負荷とカテコラミンの分泌

3 掲載誌

Work Stress 3: 255-260, 1989

4 デザイン

断面研究

5 目的

就学前の子供を持つ両親の仕事や家事の負荷による家庭でのカテコラミン分泌の変化を調査する

6 曝露指標

仕事、家事の負荷(仕事の要求度、満足度、ストレスなどについて質問紙によって調査)

7 結果指標

尿中カテコラミン(土曜日、日曜日の家庭での尿を測定)

8 比較指標

仕事、家事の負荷でグループ分けをして、尿中カテコラミン分泌の差をみる

9 実施国

スウェーデン

10 対象

スウェーデンの6歳の子供をもつ共働きの夫婦26組

11 結果

カテコラミンの分泌に関して、男性と女性で大きな差はなかった。しかし、仕事で長時間労働が行われていた女性において、アドレナリンの分泌上昇が有意に見られた ($r=0.48, p<0.05$)。しかし、男性においては特にみられなかった。ノルアドレナリンに関しては男性、女性ともに特に大きな差は見られなかった。

12 結論

女性において長時間労働と家庭でのアドレナリン分泌に明らかな相関がみられた。

13 要約

6歳の子供を持つ26家族の仕事と家事の負荷と家でのカテコラミンの分泌状況を調査した。両親とも少なくとも週30時間以上、外で雇用されていた。仕事と家事の総労働時間は平均で男性が85時間、女性が84時間であった。男性は仕事に多くの時間を費やし、女性は家事に多く費やしていた。子供の世話をする時間に関しては男女で大きな差はなかった。女性において長時間労働と家庭でのアドレナリン分泌に明らかな相関がみられた。

文献 ID 26

1 著者

Lynch, J et al

2 タイトル

Work place conditions, socioeconomic status, and the risk of mortality and acute myocaidial infaction

職場環境、社会経済状況と死亡の危険性と急性心筋梗塞

3 掲載誌

Am. J. Public Health 87: 617-622, 1997

4 デザイン

コホート研究

5 目的

すべての死亡と心血管系疾患による死亡、急性心筋梗塞による死亡と職場環境、社会経済状況との関係を明らかにする。

6 曝露指標

仕事の要求度、リソース(仕事をおこなうための能力や自分が許容できる仕事内容であるかなど)、収入 (健康診断時に質問紙にて調査)

7 結果指標

調査期間中の死亡(5年間の追跡調査(健康診断)による)

8 比較指標

社会状況の違いによる相対危険度

9 実施国

フィンランド

10 対象

kuopio ischemic heart study に参加した 2297 人のフィンランド人男性

11 結果

すべての死亡において高い要求と低いリソースと収入の場合 RH(Relative hazard) は 3.00(95%CI : 1.81-4.98)。高い要求と高いリソース、低い収入の場合 RH(Relative hazard) は 2.15(95%CI : 1.26-3.68)。低い要求、高いリソース、低い収入の場合 RH(Relative hazard) は 2.30(95%CI : 1.35-3.92)。心血管系の疾患による死亡の場合、高い要求と低いリソースと収入の場合 RH(Relative hazard) は 3.12(95%CI : 1.48-6.60)。高い要求と高いリソース、低い収入の場合 RH(Relative hazard) は 2.75(95%CI : 1.28-5.90)。低い要求、高いリソース、低い収入の場合 RH(Relative hazard) は 2.29(95%CI : 1.03-5.06)。急性心筋梗塞による死亡の場合、高い要求と低いリソースと収入の場合 RH(Relative hazard) は 2.59(95%CI : 1.36-4.94) であった。

12 結論

高い要求と低いリソースと収入、高い要求とリソース、低い収入、低い要求と高いリソースと低い収入の場合にすべての疾患における死亡率が高まることがみとめられた。同じようなパターンが心血管系疾患においても認められた。一方、急性心筋梗塞による死亡は高い要求、低いリソース、低い収入の場合に高まった。

13 要約

目的：すべての死亡と心血管系疾患による死亡、急性心筋梗塞による死亡と職場環境、社会経済状況との関係を明らかにする。方法：2297 人のフィンランド人男性を既往歴、生活習慣、職場環境などで調整して追跡調査を行った。結果：高い要求と低いリソースと収入、高い要求とリソース、低い収入、低い要求と高いリソースと低い収入の場合にすべての疾患における死亡率が高まることがみとめられた。同じようなパターンが心血管系疾患においても認められた。一方、急性心筋梗塞による死亡は高い要求、低いリソース、低い収入の場合に高まった。これらは、職場のサポート状況、職位などによって変化はなかった。考察：収入が死亡率や急性心筋梗塞のリスク関連があることが示唆された。

文献 ID 27

1 著者

Maruyama S, Morimoto K

2 タイトル

Effects of long workhours on lifestyle, stress and quality of life among intermediate Japanese managers.

日本の中間管理職における長時間労働のライフスタイル・ストレス・クオリティーオブライフへの影響

3 掲載誌

Scand Jwork Environ Health 22: 353-359, 1996

4 デザイン

断面研究

5 目的

日本の産業界を支えているとともに、長時間労働を強いられている中間管理職の長時間労働とライフスタイル・自覚的ストレス・クオリティーオブライフへの影響を調べる

6 曝露指標

長時間労働（質問紙法により平日の1日の平均的労働時間を自己申告）

7 結果指標

ライフスタイル（質問紙にてここ6ヶ月間の喫煙、飲酒、睡眠、運動、肥満状態、朝食摂取、間食の摂取、塩の摂取、栄養バランス、趣味の有無などを自己申告）自覚的ストレス（質問紙にてストレス強度を3グループに分類）クオリティーオブライフ（質問紙にて仕事への満足度、人間関係への満足度、職場環境への満足度、収入への満足度、家族生活への満足度、余暇への満足度、将来への希望などを自己申告）

8 比較指標

年代別の労働時間とライフスタイルの項目の有意差検定、長時間労働と自覚的ストレス、クオリティーオブライフの関連についてのオッズ比

9 実施国

日本

10 対象

日本の 110 の会社に所属する 3870 人の部長・課長と 2666 人の職長(男性)

11 結果

部長・課長では 1 日 10 時間以上労働するものが全体の 69.7%、職長では 53.2%であった。労働時間が 10 時間以上のものは睡眠不足、多忙感、食事の規則正しさ、生活の規則正しさなどの点で 10 時間以下のものと比較してよくないと感じていた。しかし、過去 6 ヶ月の体の調子には大きな違いはなかった。また、長時間労働の部長・課長では自覚的高ストレスのオッズ比は 2.51(95%CI:2.17-2.90)、クオリティーオブライフの不満足のおッズ比は 1.17(95%CI:1.02-1.36)。長時間労働の職長においては自覚的高ストレスのオッズ比は 2.35(95%CI:2.01-2.75)、クオリティーオブライフの不満足のおッズ比は 1.26(95%CI:1.08-1.46)であった。

12 結論

中間管理職の長時間労働はライフスタイルの偏り、高ストレス、クオリティーオブライフへの不満などを引き起こす。

13 要約

日本の産業界を支えている中間管理職は、その職責から長時間労働を強いられている場合が多い。今回の調査でも 1 日 10 時間以上労働するものが部長・課長の 69.7%、職長では 53.2%であった。1 日 10 時間以上の長時間労働ではライフスタイルの偏りが顕著であった。また、長時間労働の部長・課長では自覚的高ストレスのオッズ比は 2.51(95%CI:2.17-2.90)、クオリティーオブライフの不満足のおッズ比は 1.17(95%CI:1.02-1.36)。長時間労働の職長においては自覚的高ストレスのオッズ比は 2.35(95%CI:2.01-2.75)、クオリティーオブライフの不満足のおッズ比は 1.26(95%CI:1.08-1.46)であった。

文献ID 28

1 著者

McNamee R, Binks K, Jones S, Faullner D Slovak A, Cherry NM

2 タイトル

Shiftwork and mortality from ischaemic heart disease
交替勤務と虚血性心疾患による死亡率

3 掲載誌

Occup Environ Med 53: 367-373, 1996

4 デザイン

症例対照研究

5 目的

1つ目の目的としては、交替勤務と虚血性心疾患による死亡との関係を明らかにすること。もう一つの目的として交替勤務から日勤へ変更した人の虚血性心疾患による死亡との関係を明らかにすること。

6 曝露指標

交替勤務（職員記録、フィルムバッジの装着記録、労働衛生記録）

7 結果指標

虚血性心疾患による死亡(ICD 分類による虚血性心疾患による死亡と判断されたもの)

8 比較指標

交替勤務従事者または一時、従事したものの虚血性心疾患による死亡のオッズ比

9 実施国

イギリス

10 対象

原子力燃料の製造会社に1950年1月1日から1992年12月31日までの間に1ヶ月以上勤務し始めたもの。

11 結果

今回の調査の 2/3 (631 名) は交替勤務の経験があった。交替勤務経験者の方が、日勤者よりも平均勤務年数が長い傾向が見られた。虚血性心疾患による死亡に対する交替勤務と日勤の間のオッズ比は 0.79 (90%CI : 0.62-1.01)。60 歳以前に死亡した事例に限定してもオッズ比は 0.72 (90%CI : 0.49-1.04)。血压や肥満においては日勤者より交替勤務者の方が良い傾向が見られた。喫煙に関しては日勤者と交替勤務者に大きな差はなかった。交替勤務を始めた最初の 10 年間はオッズ比が 0.42 (90%CI : 0.21-0.84) 明らかに虚血性心疾患による死亡の危険性が低下していた。また次の 10 年は相対危険度は 0.94 となっていた。また、交替勤務の期間と虚血性心疾患による死亡の間にも明らかなリスクの増加はみられなかった。40 歳以上で初めて交替勤務を開始した人の場合、日勤者と比較したオッズ比は 1.18(95%CI 0.79-1.74)であった。長年勤務している人は一般的にリスクが低い傾向が見られた。41%(261 名) が仕事をやめるときには交替勤務を外れていた。交替勤務を続けているものと日勤者のオッズ比は 0.80(95%CI : 0.57-1.10)、交替勤務を途中でやめた人と日勤者のオッズ比は 1.06(95%CI : 0.75-1.49) であった。交替勤務を離れて 5 年以内ではオッズ比が 2.69(95%CI : 1.04-6.96) であった。交替勤務を離れてから 5 年以降は死亡が過剰になることはなかった。

12 結論

交替勤務の期間と虚血性心疾患による死亡の間の関係は明らかにならなかった。交替勤務から日勤へ変更になった最初の 5 年間はリスクが増加することが明らかになった。

13 要約

目的：交替勤務と虚血性心疾患の関係を調査すること。方法：症例対照研究を用いて、1950年1月1日から1992年12月31日までの間に1ヶ月以上勤務したもので75歳以下で虚血性心疾患で亡くなった方を症例とし、コントロールは症例と同じ期間、同じ会社に在籍したもので生存している者とした。給与支払い状況を含む職員記録により、交替勤務をおこなっていたかどうかをばんだんした。結果：2/3 が少なくとも1ヶ月以上の交替勤務の経験があり、新人の時には日勤者より少し健康状態がよかった。その後、10年間の身長、BMI、血压、喫煙、雇用期間、仕事の熟練度を修正した上でのオッズ比は0.90(90%CI : 0.68-1.21) であった。交替勤務の期間と虚血性心疾患による死亡の間の関係は明らかにならなかった。交替勤務から日勤へ変更になった最初の 5 年間はリスクが増加することが明らかになった。考察：この研究では交替勤務は虚血性心疾患による死亡の危険性を増加させることはない